

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	移動動詞構文における他動性の問題
Author(s)	朴, 垠貞
Citation	ニダバ , 27 : 38 - 46
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048027
Right	
Relation	



移動動詞構文における他動性の問題

朴 垠 貞

1. はじめに

移動動詞構文は他動性が低いと思われる文(自動詞文)でありながら、日本語においては「を」格をとる場合がある。この場合の「を」格は<経路>あるいは<起点>を表している。韓国語の「을(ul)」格も、経路指向性移動動詞と共に用いられると日本語の「を」格と同じく<経路>を表すことができる。

本稿では、移動動詞構文に表れる日本語の「を」格と韓国語の「을(ul)」格について他動性という概念を用いて、その意味機能を明らかにしたい。そして、同時に移動動詞構文における他動表現の違いについても言及したい。

2. 移動動詞構文における日本語と韓国語の他動性の度合いの比較

他動性についてHopper and Tompson(1980)は、他動詞と自動詞をはっきり二つに分けられるものではなく、他動性(transitivity)の度合いの問題であることを主張した。つまり、自動詞であっても、低いとはいえ他動性があるといえるのである。

他動性を構成する要素としてHopper and Tompson(1980)は、次のようなものをあげている。participant(関与者(もの))、kinesis(動性)、volitionality(意志性)、mode、aspect、agency、affectedness(変容性)などである。この中でもaffectedness(変容性)については、日本語と韓国語では関与者のうちの被動者(patient)が影響を全体にうけるか、部分的にうけるかが格表示で区別されるといえる。これは移動動詞構文における経路を表す「を」格の全体性としてよく現れている。

日本語と韓国語の移動動詞構文における他動性を考えるとき、まずは、関与者(事物)が二つあるという条件に当てはまるかどうかを考慮しなければならない。そして、移動動詞構文は場所が移動の対象になるので、場所が関与者になりうるかどうかという問題が起こりうるが、場所は受動文の主語にはならないが、本稿では場所を関与者として扱うことにする。

日本語における「が」-「を」構文、そして韓国語における「가(ka)」-「을(ul)」構文の多くは他動詞構文として知られている。日本語の「が」-「を」構文の多くが他動詞

文とはいえ、すべての「が」－「を」構文を他動詞構文と見なすことはできない。韓国語においても同じことがいえる。

まず、他動性の原型から他動性が低いと思われる日本語の文⁽¹⁾を韓国語と比べて考察することにする。

[1]日本語の「に」構文と韓国語の「을(ul)」構文

(1)花子が太郎にかみついた。

하나꼬가 다로를 물었다.

hanakkoka talolul mwulessta

(2)花子が太郎に触った。

하나꼬가 다로를 만졌다.

hanakkoka talolul mancyessta

(3)太郎が馬に乗って草原を走った。

다로가 말을 타고 초원을 달렸다.

taloka malul thako chowenul tallyessta

(1)は、関与者が二人（花子と太郎）いて、意味的には意図的な動作が対象に及んで変化を起こすという他動性の原型に近い表現である。韓国語においては「을(ul)」格が用いられているが、日本語では「を」格ではなく「に」格が用いられている。これは、日本語の「に」格には「を」格ほど強くはないが他動的な要素が含まれていることを意味している。

[2]日本語の「に」構文と韓国語の「을(ul)」構文

(4)彼は父に似ている。

그는 아버지를 닮았다.

kunun apecilul talmassta

(5)花子が駅で偶然友人に会った。

하나꼬가 역에서 우연히 친구를 만났다.

hanakkoka yekeyse wuyenhi chinkwulul mannassta

(6)太郎が花子にぶつかった。

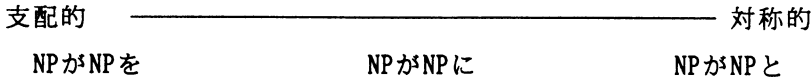
다로가 하나꼬하고 부딪쳤다.

taloka hanakkohako pwuticchyessta

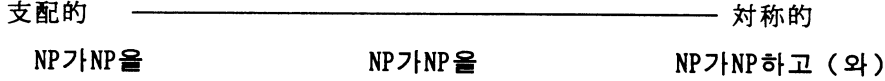
日本語の「に」格は、韓国語では、(4)(5)のように「을(ul)」格が用いられている。この場合、日本語の「に」格は[1]とは違い「と」に置き換えることができる。韓国語も「하고(hako)」に置き換えることができる。韓国語は、日本語の「に」格に当てはまる「에(ey)」格には置き換えることができない。(4)(5)のように日本語の「と」と韓国語の「하고(hako)」に置き換えられることは二つの関与者が対等関係にあることを意味している。そして、

(6)の韓国語も「하고(hako)」が用いられたので対等関係であることがわかる。この対等関係についてはヤコブセン(1989)で詳しく説明されている。

ヤコブセンは、「NPがNPを」という格配列の文では「が」を伴う方の文の名詞句が、必ず「を」を伴う方の名詞句に対して上位に立つという非対称的關係になっていると述べている。この非対称的な関係を、「支配関係」と呼んでいる。「対称性」と「支配性」を一つの意味的連続体の両極端にあるものと考えれば、「を」格文、「に」格文「と」格文のそれぞれにおける二名詞句の關係は次のようである⁽²⁾。



これは「を」格文において「二つの関与物のうち、一方が他方に対して支配的立場にある」という意味要素を認めることが出来る。しかし、「に」格文は「を」格文と「と」格文の中間的な性質をもっていると述べている。従って、この説明は上記の[1]の韓国語は支配関係として日本語は「に」格が用いられて支配関係を和らげるような表現となる。つまり、日本語は形式上他動的な表現を避けているようにみえるのである。[2]では、日本語では「に」格が用いられて「と」に置き換えることが可能である。[1]の「に」格は「を」格に近く、[2]の「に」格は「と」に近いものである。「に」格は、[1]の他動性が高い動詞と、[2]の他動性が低い動詞と共に用いられている。韓国語では、[1]の「을(ul)」格は「하고(hako)」に置き換えることができないが、[2]の「을(ul)」格は「하고(hako)」に置き換えることができる。ヤコブセンの上記の図を参考にして韓国語を見てみると次のようになる。



韓国語の「을(ul)」格は、[1]のように他動性が高い場合にも、[2]のように他動性が低い場合にも用いられる。つまり、「을(ul)」格は日本語の「を」格に比べ他動性の低い動詞にまで使われることになる。

[3]移動動詞構文

- | | |
|---|--|
| <p>(7)宇宙飛行士が<u>宇宙</u>に行く。
우주비행사가 <u>우주를</u> 간다.
wucwupihayngsaka <u>wucwulul</u> kanta</p> <p>(9)生徒が列をつくって<u>橋</u>を渡った。
학생들이 한줄로 <u>다리를</u> 건너갔다.
haksayngtuli hancwullo <u>talilul</u> kennekassta</p> | <p>(8)太郎は朝早く起きて<u>家</u>を離れた。
다로는 아침 일찍 일어나 <u>집을</u> 떠났다.
talonun achim ilccik ilena <u>cipul</u> ttenassta</p> <p>(10)私は家まで<u>3キロ</u>を歩いた。
나는 집까지 <u>3키로를</u> 걸었다.
nanun cipkkaci <u>3khilolul</u> kelessta</p> |
|---|--|

移動動詞構文において(7)と(8)のように<経路>と<起点>を表す場合に「を」格が用いられる。つまり、「宇宙」「家」の全体を表している。そして、(9)は具体的な移動を表し

ているが、「を」格が用いられている。移動動詞構文における「を」格は全体性と深く係わっている。(10)も「3キロ」のすべてを表している。移動動詞構文の場合、関与者の一方(有生物、乗り物)が他方(場所)に全体的に影響を与えているといえる。

次に日本語では自動文、韓国語では他動文で表れている例を見てみよう。

[4]願望文と可能文

(11) 水が飲みたい。

물을 마시고 싶다.

mwulul masiko siphta

(13) あなたが好きだ。

당신을 좋아한다.

tangsinul cohahanta

(12) 日本語が話せる。

일본어를 할수 있다.

ilponelul halswu issta

(14) 鶏は空が飛べない。

닭은 하늘을 날수 없다.

talkun hanulul nalswu epsta

日本語では「が」が用いられた自動表現であるが、韓国語では「을(ul)」が用いられた他動表現として表されている。このように、日本語では自動表現で表されたものが韓国語では他動表現で表された例は多くある。日本語に自動表現が多いのは日本語の一つの特徴であるといえる。

[1]から[4]までの例は、日本語と韓国語において意味的な面ではそれほどの相異はない。しかし、形の面では異なる((1)-(6)と(11)-(14)) ことに関して両言語において相手に伝達するときどういう立場で話すのかといった点が議論の焦点になる。つまり、韓国語では他動的な表現で相手に自分の立場を明確に表しているが、日本語では自動表現で自分の意志、意図を押さえて話す丁寧な表現で表している。

他動性(のパラメータ)においてもっとも重要な点は「動作が及ぶ」と「変化を起こす」という点にある。「変化を起こす」というのは、つまり、他動性は基本的に形の面より意味の面で判断されることを意味している。韓国語で「을(ul)」格が用いられていることが日本語に比べて高い他動性を意味していることではない。しかし、日本語に比べて他動的(形の面では)な表現に見えることは事実である。そして、日本語の「に」格にも他動性の要素があることを意味している。このようなことは表現上の問題になる。

移動動詞が動作性名詞と共に用いられた場合、日本語においては「に」格が用いられるが、韓国語では「을(ul)」格が用いられる。次は日本語の「動作性名詞+「に」+行く」というパターンが韓国語において「動作性名詞+「을(ul)」+가다(行く)」というパターンになっている例である。

(15) 泳ぎに行く。

수영을 가다.

(16) 挨拶に行く。

인사를 가다.

swuyengul kata
(17)お使いに行く。
심부름을 가다.
simpwulumul kata

insalul kata
(18)遠足に行く。
소풍을 가다.
sopwungul kata

「散歩」「釣り」「旅行」などの名詞はように[+動作性]をもっている名詞である。そして、ここでの日本語と韓国語の違いは[+目的性]の有無にあるといえる。(15)の「泳ぎに行く」というのは、泳ぐという動作とプールなどの泳ぐ場所が想定される。韓国語の場合は、場所よりも泳ぐという行為そのものが強く感じられる。このような動作性名詞としてはさらに次のようなものがある。

旅行(여행)、お墓参り(성묘)、講義(강의)、お見舞い(문병)、登山(등산)、遠征(원정)、ピクニック(피크닉)、配達(배달)、食事(식사)など

3.日本語の「を」格と韓国語の「을(ul)」格の全体性について

日本語において他動性の要素の一つは、「を」格の存在である。この「を」格は、他の格助詞に換えにくい性格をもっている。日本語の移動動詞構文において<起点>を表すときに用いられる「を」格は「から」格に換えることができるが、<経路>を表すときに用いられる「を」格は他の格助詞に置き換えることができない。

- (19)学校を(から)出る。
(20)学校を(*へ、*に、*で)通過する。
(21)学校に(へ、?を、まで)行く。

そして、この<経路>を表すとき用いられる「を」格は<起点>の「を」格とは違い目的補語として扱うことができる。目的補語として扱えるのは、「何」という疑問詞の答えになるからである。

- (22)a.太郎は何をしているんだ。
b.橋を渡っています。
?学校に行っています。
?家から出ています。

上記のように<経路>表現の「を」格は、<起点>表現や<着点>表現よりも他動性が深く関わっている⁽³⁾。これはKuno(1973b)の例にもよく現れている。

- (23)a.道に歩く。(goal point)
 b.道で歩く。(spatial limit)
 c.道を歩く。(entire)
 (24)海*に/*で/を泳ぎ切る。

上記の(23)(24)の例は、韓国語においても同じことがいえる。次は、(26)(27)を韓国語に訳した例である。

- (25)a. 길에 (로) 걷다⁽⁴⁾. (goal point) b. 길에서 걷다. (spatial limit)
 kiley(lo) ketta kileyse ketta
 道に歩く。 道で歩く。
 c. 길을 걷다. (entire)
 kilul ketta
 道を歩く
 (26)바다*에/*에서/를 헤엄쳐 건너다.
 pataey/eyselul heyemchye kenneta
 海 *に/*で/를 泳ぎ 渡る。

日本語の「を」格は起点指向性移動動詞と共に用いられて<起点>を表し、そして経路指向性移動動詞と共に用いられて<経路>を表す。<経路>を表す「を」格については全体性として説明することができる。<起点>を表す「を」格についても抽象的な場合に全体性が現れる。一方、韓国語の「을(ul)」格は<起点><経路>だけでなく<着点>も表している。次の例を見てみよう。

- (27)a. 太郎が家を出ていった。 <起点> b. 太郎が橋を渡った。 <経路>
 (28)a. 철수가 집을 나갔다. <起点> b. 철수가 다리를 건넜다. <経路>
 thelswuka cipul nakassta thelswuka talilul kennessta
 チョルスが家を出ていった。 チョルスが橋を渡った。
 c. 철수가 학교를 갔다. <着点>
 thelswuka hakkyolul kassta
 チョルスが学校に行った。

(27)(28)における「家」「橋」「学校」は、それが受動文の主語にかえることができないので目的語としては認められない。「橋が太郎に(よって)渡られた」などとはいえない。このような「を」格は、影山(1989)では文法格⁽⁵⁾とされている。しかし、この「を」格は

単なる形式的なものではなく述語の意味に従い全体性を引き出している。

<経路>表現における「を」格が対象全体を表していることは、Kuno(1973b)により証明された。この全体性は<経路>を表す場合だけでなく、<起点>を表す場合にも用いられる。その場合は、主に抽象的な意味としての<起点>である。次の杉本(1991)の例をみてみよう。

(29)大学を出る。(卒業する)

大学から出る。

(30)家を出る。(一人立ちする)

家から出る。

韓国語においては、<起点><経路><着点>に「을(ul)」格の全体性の影響が見られる。

<起点>

(31)대학을 나오다.

tayhakul naota

大学を出る。(卒業する)

대학에서 나오다.

tayhakeyise naota

大学から出る。

(32)집을 나오다.

cipul naota

家を出る。(一人立ちする)

집에서 나오다.

cipeyise naota

家から出る。

<着点>

(33)학교를 가다.

hakkyolul kata

学校に行く。

회사를 가다.

hoysalul kata

会社に行く。

(33)は「学校」「会社」という場所に行くのではなく、「勉強をしに」などの目的を表している。「을(ul)」格が抽象的な意味を表しているのである。従って、(31)(32)の<起点>表現と同様に(33)においても「을(ul)」格を用いることで、「学校」と「会社」という機関全体が表されているといえるのである。

上記の例のように「を」格と「을(ul)」格は<経路>だけでなく<起点>においても全体性が見られる。そして、韓国語においては<着点>においても全体性としての機能が働いている。<経路>を表す「を」格の全体性というのは、韓国語の格標識と比較してみればより明確に現れてくる。

(34)강을 건너다.(全体的な経路)

kangul kenneta

강으로 건너다.(部分的な経路)

(35)강을 완전히 건너다.

kangul wncenhi kenneta

?강으로 완전히 건너다.

kangulo kenneta

川を渡る。

kangulo wancenhi kenneta

川を渡りきる。

韓国語では<経路>を表す場合は、全体的な経路と部分的な経路がある。全体的な経路は「을(ul)」格における他動性の表れの一つでもある。

4. まとめ

他動性の原型から離れた移動動詞構文を他動詞であるか自動詞であるかという問題から他動性の度合いの問題として扱った研究の考察に従い、日本語の「を」格、韓国語の「을(ul)」格の働きが見えてきた。韓国語の「을(ul)」格は日本語の「を」格に比べて他動性が低い動詞にまで使われている。そして、日本語の「を」格の全体性は<経路>だけでなく<起点>にも一部現れている。一方、韓国語における「을(ul)」格は<経路>に全体性が、そして<起点><着点>にも全体性が現れているといえる。

日本語では自動表現として表れたのが、韓国語では他動的に表現される例が比較的によくある。これは日本語が自動表現で丁寧さを表していることを反映している。韓国語では他動表現で自分が意図していることを相手に明確に伝達することが重要視される。

<注>

(1) [1]から[4]までの例を中心に他動性の高低を次のように表してみた。

・日本語の場合

パラメータ	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)
関与者二人以上	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
動作が及ぶ	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+
変化を起こす	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
意図性	+	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+
「がーを」	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-

・韓国語の場合

パラメータ	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)
関与者二人以上	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

動作が及ぶ	+	+	+	-	+	+	+	+	+	-	-	-	+
変化を起こす	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
意図性	+	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+
「(ka)-(ul)」	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

(2) ヤコブセン(1989:p.225)は「支配関係」(非対称関係)について次のような例で説明している。

- (1)AがBを含む。 (2)AがBと違う。 (3)AがBに似ている。
 BがAを含む。 BがAと違う。 BがAに似ている。

動詞「含む」が伴う二つの名詞句を入れ替えると、意味的に全く違う文になってしまう。「含む」のように「を」格を伴う動詞は、「と」を伴う述語と著しく異なっている。「に」格文は、この点では「を」格文と「と」格文の中間的な性質を持っている。「似る」に伴う名詞句を入れ替えると、完全に同じ意味の文にはならないが、かといって「含む」ほど意味的に違うものでもない。

(3) 「対格NPとaffectednessの間の相互関連性は、他動性の高さの要素であるが、伝統的な日本語の文法においては「passage(通り道、通過)」の「を」として知られる。つまり、これは「を」の用法の中で見られる(Sugamoto)。移動動詞は目的語としてNP-oをとる。この「を」は動詞がNPの継続的で単一方向の全体地面をカバーするように場所をとることになる(Kuno1973b)」

(4) 韓国語では不自然な文であるが、Kuno(1973b)の例をそのまま訳したので訂正していない。「道」という名詞を「学校」などの名詞に換えると自然な文になる。韓国語の「에(ey)」格と「로(lo)」格が<着点>を表すことには違いがない。

(5) 起点格、経路格としての意味をもっているのではなく形式的な意味だけをもっている。

【参考文献】

影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
 須賀一好・早津恵美子(1995)『動詞の自他』ひつじ書房
 杉本武(1986)『いわゆる日本語の格助詞の研究』凡人社
 仁田義雄編(1991)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
 ウェスリー・ヤコブセン(1989)「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』
 くろしお出版
 우형식(1996)『国語他動構文研究』박이정